

書字に困難のある児童への書字指導の工夫と実践

-ヨコミネ式を取り入れた書字指導を通して-

沖縄県立大平特別支援学校
小学部 玉城悠太

I テーマ設定理由

特別支援学校学習指導要領の改訂により、特別支援学校(知的障害)の各教科には、改訂前は各教科にしか設定されていなかった目標が、各段階に設定されるようになり、各段階の内容の充実が図られている。また、小学部3段階の目標に到達した児童は、小学校の各教科の内容等を取り入れることが可能になった。これは、学びの場が異なっても、三つの「資質・能力」の柱によって構造化されたことにより、特別支援学校(知的障害)と小学校における学びの連続性が確保できるようになったからといえる。

本研究対象児は小学部3年生のダウン症の男児で、簡単な日常会話ができ、教師や友達に対して手紙やメッセージを書くなど「もっと書けるようになりたい」「相手に伝えたい」という意欲が見られる。児童は、文字や手紙を書くことが好きで、休み時間にホワイトボードで給食メニューを書いたり本日の学習プログラムを書いたり、仲良しな友達に対して家庭で手紙を書いてきてプレゼントをしたりすることがある。また、個別の教育支援計画においては「カタカナが書けるようになってほしい」という保護者の願いがある。児童はこれまで書字の学習で、平仮名や片仮名練習などを行ってきた。繰り返し練習に取り組んでいるが、書字力は十分とは言えず、その中でも「さ」「み」などの斜めの線を垂直に書いてしまう誤りや、線の向きの誤り、文字の部品の配置のバランスの悪さなどが見られ、さらに、「あ」や「む」では、文字の終わりが回りきらずに終わっている等の課題がある。日々の「書くこと」に対する意欲的な様子を見て、児童に合った書字指導の工夫をして書字力を高めていく必要があると考えた。

横峯(2019)が考案したヨコミネ式では、子供たちの学習の様子を観察している中で、「あ」や「む」といった曲線の入った文字ではつまづいているのに、字画が少なく、直線を使った文字だと子供たちは嫌がらずにスラスラかいていることに気付いた。そのことから字画が少なく、直線を使った文字や書きやすい簡単な文字から順に書けるようにした『ヨコミネ式95音』を考案した。『ヨコミネ式95音』では、曲線が多い「あ」は書きにくいので、「一」(横棒)から始まり、「丨」(縦棒)、「十」「二」の順に進めていき、徐々に曲線が多い難しい文字へとステップアップしていくのである。また、『ヨコミネ式4つのスイッチ』では「子供は競争したがる」「子供は真似をしたがる」「子供はちょっとだけ難しいことをしたがる」「子供は認められたがる」という4つのスイッチを刺激することで、児童のやる気を引き出せることがわかった。そして樺沢(2017)によると「人間が深い集中を持続させられるのは15分程度」と伝えている。池谷(2017)が行った実験では「連続して60分」勉強を行ったグループよりも「15分×3(計45分)」勉強を行ったグループの方が、テストの点数が高いという結果が出た。このことから、10分～15分の短時間集中学習に取り組むことで高い成果が期待できることがわかる。

そこで、本研究では、『ヨコミネ式95音』と『ヨコミネ式4つのスイッチ』を活用した短時間集中学習で書字指導に取り組んでいく。学習に関しては家庭との連携も大切にしていきながら進めていくことも重要だと考える。本児が、文字を書くことに意欲を示している今の機会を大切に、この時期に児童の実態に合わせた文字指導を進めていくことは大変意義深いことと考え、本研究を設定した。

II 研究仮説

書字指導の学習において、文字習得のためのレディネスがどのくらいできているのか実態把握を行い、『ヨコミネ式95音』と『ヨコミネ式4つのスイッチ』を取り入れた短時間集中学習に取り組むことで、平仮名書字の誤りへの克服とつながり、「もっと書けるようになりたい」「相手に伝えたい」という意欲をさらに高めることができるであろう。

Ⅲ 研究の方法

1 児童の実態把握

- (1) 資料等から実態把握（前年度の引継ぎ資料、保護者・関係機関からの情報収集）
- (2) 行動観察・記録（日々の行動の観察・記録）
- (3) 平仮名 50 音実態チェック表の経過的測定

2 文献・資料による理論研究

3 指導実践

- (1) 書字指導の実施、専門家からのアドバイス
- (2) 文献・資料による理論研究教師間での児童への支援の共通確認
- (3) 指導実践の評価及び研究のまとめ

IV 研究の計画

期間	研究内容
1 学期	○児童の実態把握 ○研究テーマの検討・決定 ○資料・参考文献の収集 ○理論研究 ○児童の行動観察・記録 ○指導方法の検討 ○教材教具の作成 ○指導実践
2 学期	○指導実践及び観察・分析 ○指導方法の検討・改善 ○研究のまとめ
3 学期	○研究のまとめ ○研究の成果と今後の課題の検討

V 研究の実際

1 対象界の実態

- (1) 対象児：児童A(男子) 小学部3年生(S-M 社会生活能力検査 CA6-2、SQ45、SA2-9)
- (2) 障害名：知的障害、ダウン症候群、甲状腺機能低下症
- (3) 平仮名50音実態チェック表(令和2年5月実施)

5月の実態把握の際に、児童Aは平仮名・片仮名のどちらも読むことに関しては問題ないということがわかった。ただ、実際に平仮名50音実態チェック表(図1)に書いてもらうと、平仮名と片仮名が混同していたり、「あ」「ね」「を」等の曲線が入った文字を書きにくそうにしたりしていることがわかった。児童Aは食べ物が大好きで休み時間によく給食メニューをホワイトボードに書いていることがある。また、友達へ手紙をよく書くことに着目し、きれいな字を書くと自分自身だけでなく、家族や先生、そして友達みんなが読むことができるということを児童Aに対してアプローチすることで、学習意欲を引き出し、児童Aの主體的な学びへと繋げていく。

[illegible]

図1 平仮名50音実態チェック表

2 指導の実際

- ### (1) 指導内容の工夫

特別支援学校学習指導要領解説各教科等編では「知的障害のある児童の学習上の特性としては、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場面の中で生かすことが難しいことが挙げられる。そのため、実際の生活場面に即しながら、繰り返して学習することにより、必要な知識や技能等を身に付けられるようにする継続的、段階的な指導が重要となる」とある。このことから、毎日継続して繰り返し取り組む必要があると考えた。そこで、児童が継続して繰り返し取り組めるように朝の活動の中に10分～15分程度の短時間集中学習『個別学習』（図2）の時間を設定した。また、ことができるように児童が『個別学習』を終わると朝の会の時間ま



図2 個別学習の様子

程度の短時間集中学習『個別学習』(図2)の時間を設定した。また、より意欲的に学習に取り組むことができるように児童が『個別学習』を終わると朝の会の時間まで『ご褒美タイム』の時間で自

由に好きな遊びができる時間を設定し、児童が意欲的に取り組めるように工夫する。

(2) 学習内容と児童の様子

学習を進めていく中で『ヨコミネ式4つのスイッチ』で「子供は競争したがる」「子供は真似をしたがる」「子供はちょっとだけ難しいことをしたがる」「子供は認められたがる」の要素を取り入れて学習に取り組んだ。1つ目の「子供は競争したがる」では、文字通り子供は競争することが大好きであり、本対象児童も同様である。児童一人にだけ「さあ、個別学習をやろうね」と言うよりも別の児童Bに対しても同じ課題を設定し、「さあ、誰が丁寧に早く書けるかな？」と言うと、一斉に書き出して競争を始める。児童は、「〇〇さんよりも丁寧に早く書くことができた」や「次は絶対に勝ってやろう」という意欲的な態度を引き出すことができた。学習を進めていく中で、無理に取り組ませて「やらされる」という感覚にさせるのではなく、「自分もやらなきゃ」という気持ちにさせることが大事である。2つ目の「子供は真似をしたがる」では、「〇〇さん、もう個別学習始めているの？早いね！」と声をかけることで友達の真似をして「自分もやらなきゃ」という気持ちになり、自主的に取り組むことができた。また、3つ目の「子供はちょっとだけ難しいことをしたがる」では、『ヨコミネ式95音』(図3)の

ヨコミネ式 95 音									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
一	丨	十	ニ	エ	ノ	イ	テ	ナ	ハ
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
フ	ラ	ヲ	リ	サ	ヘ	ト	コ	ヨ	レ
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
ル	ホ	オ	カ	メ	ワ	ウ	ス	ユ	ロ
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
ミ	ク	タ	ヌ	マ	ア	ヤ	セ	ヒ	モ
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
ケ	ム	キ	チ	ネ	ソ	ン	シ	ツ	ヘ
51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
り	く	つ	し	い	こ	に	た	け	も
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
う	て	と	ち	ろ	る	ら	か	の	ひ
71	72	73	74	75	76	77	78	79	80
せ	さ	き	よ	ま	は	ほ	わ	れ	ね
81	82	83	84	85	86	87	88	89	90
め	ぬ	す	み	や	そ	な	お	ゆ	を
91	92	93	94	95					
ふ	え	ん	あ	む					

図3 ヨコミネ式 95 音

通り、「一」(横棒)から始め、「丨」(縦棒)、「十」「ニ」の順に進めていき、徐々に曲線が多い難しい文字へとステップアップしていった。ところが、順番にやっていく中で児童は『ヨコミネ式95音』の90番「を」の文字が苦手な場面が見られた。横峯は常に「教材に子供を合わせないこと。子供を勉強好きにさせるためには、遊び感覚でやってもらうことが大切である。」と伝えていて、無理やりさせて勉強嫌いにさせない為、できないところは飛ばし、やりたくないところも飛ばせばいいという考えなのである。実際に児童が苦手な部分の教材プリントに取り組んでいる場面ではそこまで細かく指導を取り入れていなかったが2回、3回と繰り返し取り組んでいく中で、自分で文字のバランス等を意識して書くことができるようになっていた。ドリルや学習プリントを使う場合には、教材のページ順に合わせないで、その子のレベルにあった「ちょっとだけ難しいこと」を選んで、させてあげる大切さがわかった。最後の4つ目「子供は認められたがる」でもあるが、子供は認めてもらうと、やる気のスイッチが入ることがある。実際、児童が苦手な「を」の書字を無理強いせずにできるようになった際には、教師が「よくできた。合格です！」と認めると嬉しそうな顔をして「もっとやりたい」と次の学習プリントに挑戦する様子が見られた。このような活動を繰り返していくことで、書字の変化や児童の学習に対する意欲の高まりが少しずつ見られるようになってきた。

3 仮説の検証

書字指導の学習において、文字習得のためのレディネスがどのくらいできているのか実態把握を行い、『ヨコミネ式95音』と『ヨコミネ式4つのスイッチ』を取り入れた短時間集中学習に取り組むことで、平仮名書字の誤りへの克服とつながり、「もっと書けるようになりたい」「相手に伝えたい」という意欲をさらに高めることができるであろう。

学習当初は児童から「お勉強嫌だ」「もっと遊びたい」という発言がよく聞こえたが、児童の実態に合わせた『ヨコミネ式95音』教材プリントの活用や『ヨコミネ式4つのスイッチ』の取り組み、また、モチベーションが高まるよう学習後に児童が興味を示す様々な『ご褒美タイム』を取り入れ、これらの活動を繰り返すことで書字が丁寧になっていった。他の教師から「〇〇さん、とても字が綺麗になったね」と伝えられると「褒められて嬉しいなあ」や「先生、もっとプリントやりたい」等の意欲的な発言が多く聞こえてくるようになった。保護者とやりとりする連絡帳には「今

日も元気です」や「今日もよろしくお願いします」等の文を自分で記入することも増えてきた。また、令和2年5月と令和3年2月に実施した平仮名50音実態チェック表でも図4と図5を比較してみると、曲線が入った「ね」等の文字でまだ書きにくそうな部分も見られるが、令和2年5月時には50字中19字が平仮名ではなく片仮名で記入されていたのに対して、令和3年2月時には片仮名の記入が0になっている。この結果から、正しく書ける平仮名が増えたといえる。

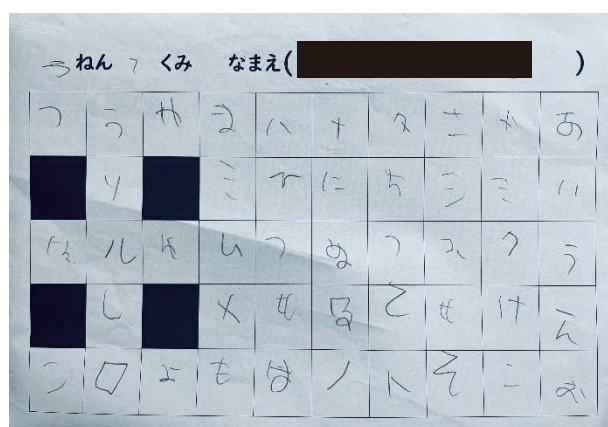


図4 平仮名50音実態チェック表(令和2年5月)

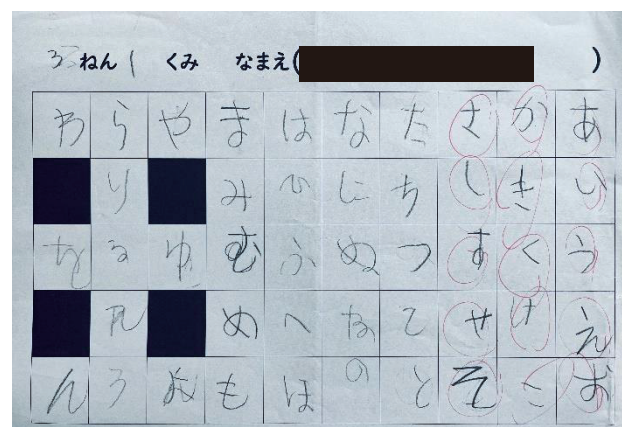


図5 平仮名50音実態チェック表(令和3年2月)

4 考察

児童の集中が持続し、モチベーションを高める為の工夫として朝の活動の中に10分～15分程度の短時間集中学習『個別学習』の時間を設定や児童の実態に合わせた『ヨコミネ式95音』教材プリントの活用、そして学習のやる気を引き出す『ヨコミネ式4つのスイッチ』の導入や『ご褒美タイム』を取り組むことで集中を持続して意欲的に学習することができたと考える。

VI 成果と今後の課題

1 研究の成果

『ヨコミネ式95音』教材プリントの活用や『ヨコミネ式4つのスイッチ』の導入、10分～15分程度の短時間集中学習『個別学習』、『ご褒美タイム』の時間を設定することで意欲的に学習に取り組める環境を設定することができた。また、特に大きな成果として、児童は『ご褒美タイム』で遊ぶことを楽しみにしていたが、『ヨコミネ式4つのスイッチ』「子供は競争したがる」「子供は真似をしたがる」「子供はちょっとだけ難しいことをしたがる」「子供は認められたがる」の要素を取り入れると、やらされるというより自主的に学習に取り組む場面が多く見られるようになった。また、難しい課題に対してもすぐ諦めることなく間違えてでも挑戦しようとする姿勢や「先生、もう一回やりたい」等の意欲的な発言が出てくるようになった。そして『ヨコミネ式4つのスイッチ』は書字指導だけに限らず、あらゆる学習場面で応用できることが大きな成果と言える。

2 今後の課題

今回の取り組みでは児童の書字力の向上や自主的に学習に取り組む意欲的な態度を養うことができたが、児童が教師や友達に対して手紙やメッセージを書くことが好きなのに対して丁寧な作文指導や日記指導をするまでには至らなかったことが大きな課題である。3学期の後半から学校や家庭生活の中で心に残ったことを取り上げて書くように指導したが、助詞や接続詞等の使い方に慣れていない為、分かりづらい文章が目立った。少しずつ改善に向けて取り組んではいたが定着することができなかったののでしっかりと記録に残して次年度以降の課題として引き継いでいきたい。

〈主な引用・参考文献〉

- 横峯吉文 (2019) 『ヨコミネ式 子供の才能を伸ばす4つのスイッチ』 日本文芸社
 文部科学省 (2018) 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 各教科等編(幼稚園・小学部・中学部)』 開隆堂
 池谷裕二 (2017) 『勉強時間による学習の定着・集中力に関する実証実験』
 樺沢紫苑 (2017) 『脳のパフォーマンスを最大まで引き出す 神・時間術』 大和書房
 長深田悟 (2012) 『幼児教育の決定版 ヨコミネ式教育教科書』 A Z・C 有限会社